

# 小田原史談

第79号

発行所 小田原史談会  
小田原市西栢山3310

## 通常総会にて新役員決まる

去る四月十七日午後一時より中央公民館において通常総会が開催された。出席者一同により収支決算および予算について質疑応答が行なわれ、今度改めて常任理事制を採り、また、規約の一部を改正し副会長を四人として活潑に文化活動を行なうことが確認されました。

五十年年度収支決算書及び五十一年度予算書

(別表の通り)

◇総会で決定した新役員は次の通りです。

- |      |       |       |       |
|------|-------|-------|-------|
| 顧問   | 中野敬次郎 | 立木 望隆 | 竹見 竜雄 |
| 会長   | 井上 英一 | 加藤 誠夫 |       |
| 副会長  | 鈴木 平八 | 香川 政治 | 杉崎 正五 |
| 会 計  | 相沢 栄一 |       |       |
| 監 事  | 沖山 敏子 | 曾我 保夫 |       |
| 事務局長 | 富田 千春 | 岩田 栄  |       |
| 企 画  | 香川 政治 | 杉崎 正五 | 相沢 栄一 |
| 編集   | 穂坂 行雄 | 鈴木 平八 | 額田喜代春 |
| 常任理事 | 鈴木 貞嗣 | 後藤 浅義 | 広沢 伊助 |
|      | 松岡 俊子 | 杉山安太郎 | 山崎益太郎 |
|      | 星野喜久男 | 富田 千春 | 松本 孝作 |
|      | 石井 トシ | 岩田 栄  | 田村 隆  |

◇行事計画として

- 一、講演会 三回
- 一、史跡めぐり 六回
- (市内、市外各三回)
- 一、会報発行 六回

中島慶太郎  
長谷川秀磨  
平岡 幸雄  
川瀬 春夫



### 顧問の方々に

会長 井上 英一

史談会報をより充実させ発展させるためにも、また会員のみなさんのよりよき「心のふるさと」となるために、中野先生をはじめ五人の方々にご顧問をお願いしておりますのでよろしくお願いたします。

50 年 度 決 算		51 年 度 予 算	
(収入の部) 円		(収入の部) 円	
繰 越	831,862	繰 越	368,013
会 費	597,400	会 費	600,000
特 集	652,760	特 集	400,000
式 典	126,080	市 からの補助	30,000
市 からの補助	30,000	利 子	10,000
利 子	14,341		
計	2,252,443	計	1,408,013
(支出の部)		(支出の部)	
通 信 費	162,195	通 信 費	324,000
会 報 印 刷 代	141,500	会 報 印 刷 代	180,000
筆 耕 料	94,540	筆 耕 料	100,000
祝 儀・お 礼	50,000	祝 儀・お 礼	70,000
事 務 用 品	15,595	事 務 用 品	20,000
事 務 費	120,000	事 務 費	120,000
その他(負担金)	22,600	会 議 費	30,000
20周年記念誌代	1,000,000	市 文 連 分 担 金	2,000
20周年記念品代		予 備 費	562,013
その他	278,000		
計	1,884,430	計	1,408,013
残 金	368,013	残 金	0

小田原史談会 五十年年度決算書及び五十一年度予算書



# 長興山観桜のしおり

## 紹太寺のしだれざくら

(小田原市指定天然記念物)

一、しだれざくらとは？

シダレザクラは別名をイトザクラといひ、学名はブルヌス・ペンデュラと呼ばれます。ヒガンザクラ(アマヒガン)が突然に枝垂れ性を獲得したもので、学名のペンデュラというの『しだれる』を意味するラテン語なのです。母種はヒガンザクラはどういうわけかこの地方で自生をみたことがありません。本州・四国・九州にひろく分布していますが、不思議に箱根や小田原付近では山地にもなく、また人家にもあまり栽培されていないようです。よく花屋さんで、切り花として早春に売出す彼岸桜は、コヒガンという小型の桜で、ここでいうアマヒガンとは別物です。しかし信州などを桜の季節に旅行しますと、山にも人家の周囲にもアマヒガンは多く所によつては『ソメイヨシノ』より普及しているくらいです。恐らく日本でソメイヨシノが流行する前にはアマヒガンが山桜とならんで桜の代表種だったのでしよう。

二、樹令約三百年！

この紹太寺の枝垂れ桜は樹の高さ約十四メートル、目通幹囲二メートル六十五センチ、遠望すると高山に滝が掛るようにみごとなものです。枝も四方に平均してひろがり、樹勢も老樹ながら衰えを見せず、毎年三月下旬より開花しはじめます。さてこの枝垂れ桜、花の色が淡くほとんど白に近く、しだれるという性質がとかく姿を上品にしやすいの、高雅な雰囲気を保つ効果を果していることにお気付きでしょうか。

三、この桜の略歴

樹令三百年というは推定ですが、このように古い系統だということも古木だったからであります。ここは小田原藩主稲葉家の菩提寺として、寛文九年(一六六九年)長興山紹太寺という大寺が創建された場所です。この寺はそれまで小田原市内内角町(旧足柄病院付近)にあったといわれ、ここへ移って寺域の周囲五十町三十間、隠元の弟子鉄牛を開山とし、元禄四年ここを通つたドイツ人ケンベルも、その壮麗な様子を『江戸参府紀行』に書いています。

私達が人家の周囲でみかける枝垂れ桜は、もつと花色が濃く一見派手ですが品格の点ではどうも見劣りがするようです。このように濃色の枝垂れ桜は、園芸的な呼び名をベニシダレといひ、最も濃色で八重のものをも呼んで、いずれにせよ園芸的に改良されたものです。しかし山野に自生するアマヒガンつまり枝垂れ桜の原種は、この紹太寺の桜のように淡色のものが基本です。いい換えれば紹太寺の

枝垂れ桜は、最も古典的な枝垂れ桜——遠い祖先の面影を伝えている桜だということになります。

当時の建物は大雄宝殿・心空堂・法喜堂・開山堂・慈昭堂・円明殿・清浄観などのほか、清雲院・梧桐院・甘露院・幻寄庵・梅原庵の塔頭群がありました。特に異色なのはその庭園構成で、黄檗宗という当時新鮮な宗派らしく、旧来の禅院式庭園や池泉廻遊式庭園とは全く別の手法でした。その詳細は現在でもほとんど調査されていませんが、小さな庭園を夫々独立させ、それを苑路で次第につない

### 随筆

## 国鉄開業五十年記念の古いレールの文鎮と

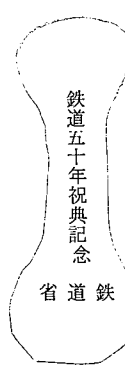
### 当時の(字)時刻表並びに賃金表の想い出

額田 喜代春

(一)文鎮

わが国の鉄道は明治五年十月十四日(旧暦九月十一日)に新橋―横浜の両駅に明治天皇の御臨幸を願つて新橋(現在の汐留貨物駅)から横浜(現在の桜木町)までの二九・一キロが開通したので最初で今日では丁度百三年になります。国鉄では、この日を記念して大正十一年十月十四日を鉄道記念日として制定し毎年この日に全国の職場でお祝いをしております。

表面



は、いつも座右において、私の永い鉄道生活をしのばせてくれるのですが、五十有余年も友としてあったかと思うと、可愛いものであります。裏面に大正十一年十月十四日 厚さ約1.2cm 重量約二五〇g(六五友)

(二)時刻表と賃金

明治五年六月十二日(旧暦五月七日)に品川から横浜まで一日二往復で仮りに営業を始めたのですが、時の政府は五月三日に「品川ステーションより横浜の間汽車運転来る七日より仮りに開業相成候条、工部省より相達候事」と布達され、六日に品川で開通式が行われて、翌七日から今の東海道線が生れたのであるが、当時の品川町史(當時は品川町といつた)によると「由来陸上の近代的運輸は馬車、馬によるのみ信

じていた我町民はいうまでもなく、天下万象も今眼のあたり、この一大利器に接しては驚嘆せざるを得なかった。殊に我國における運輸革命の第一日が我品川より挙げられたのは、町民の誇りとするに足る」と記され、当時の品川町民がいかに鼻を高くして居たかが想像されます。次いで工部省は乗客心得を次のように告示したのでありますが、現在の国鉄から出される、あらゆる規則等と較べて隔世の感じが致します。

◎汽車出発時刻表及び賃金 (原文のまま)

「来る五月七日より此の表示の時刻に日々横浜並に品川ステーションより列車出発す、乗車せむと欲する者は、遅くとも此の表示の時刻より十五分前にステーションに來り切手買入れ其の他の手都合を為すべし。但発車並に着車共必ず此表の時刻を違はざるやうには請合(うけあい)がたけれども、可成大遅滞なきよう取行へし。手形は其日限り乗車一度の用たるべし。小兒四歳までは無賃、其余十二歳までは半賃金のこと。旅客は総て鉄道規則に隨ひ旅行すべし、手形検査

の節は手形を出し改(あらため)を受。又手形集の節は之を渡すべし。とあるようにその当時は乗車券といわないで、切手及手形と二通りの言葉が使われて居たのであります。それから仮りの開通當時から運転回数も増して十月十四日の開業式には九回も運転され、運賃も最初は下等(三等のこと)五十銭、中等(二等のこと)一円、上等(一等のこと)一円五十銭で、米が一升四銭か五錢位で買った當時としては

(明治五年十月十四日開通直後のもの)

東京		横濱		品川		品川		品川		品川		品川		品川		品川		品川		品川	
前出	午出	後着	午出	前出	午出	後着	午出	前出	午出	後着	午出	前出	午出	後着	午出	前出	午出	後着	午出	前出	午出
八字	九字	十字	十一字	十二字	十三字	十四字	十五字	十六字	十七字	十八字	十九字	二十字	二十一字	二十二字	二十三字	二十四字	二十五字	二十六字	二十七字	二十八字	二十九字
同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分	同五十三分

べら棒に高かったわけですが、一朱は六銭二〇五分(分)、朱が用いられたの毛、一步(分)は二十五銭一兩は一円であったのです。従って新橋一様浜間下等運賃の三十七銭五厘は一步(分)二朱ということになったのであります。それから切手(乗車券)には日本語の外に英、独、仏の三國語で印刷されておりましたが、明治九年十二月一日に、日、英の二國語に改められました。又次の表で御覧のように

う文字を使っておったのも面白いですね、なおこのようにして仮営業を始めた品川、横濱間でも、今まで見たこともない汽車が真黒い煙を吐きながら、シュッ、シュッと、しかも毎日時間をきめて走り出したことは当時としては、日本の大きな躍進であって、当時の東京日々新聞の記事を見ても汽車開通前後の風俗の一端が窺われて、現在と較べてオドロキの感じが致します。以上創業百三年前の文鎮及字(時)刻並に賃金の想い出を綴って筆をおく。(元小田原駅助役)

### 軍歌の曾我兄弟

西山 銈太郎

曾我兄弟は「曾我物語」を始めとして、詩や謡曲、歌舞伎其の他あらゆる文学芸能面に取り上げられてるが、軍歌に歌はれた事を知る人は少ない様だ。私は昭和五年十二月、近衛歩兵第一聯隊に入隊したが、この時歩兵聯隊で只一ヶ班しかなかった歩兵砲)だけが、代々木や戸山ヶ原の野外演習の帰りによく歌った。然し他中隊は勿論、其の他の戦争中の応召部隊では、歌った事も聞いた事もない史実にてらして云々と云う理屈はぬきにして、物語詩として聞いて頂きたい。

富士の裾野

かゝる名譽はいつまでも富士の山よりなほ高し斯る名譽は千代かけて富士の山よりいや高し

(武揚堂書店発行 新撰軍歌集より)

# 【民話】橘地区

## 竹見 龍雄

◎狼に塩を喰はして

「茅」を刈る

川勾明神の(ちまき) 神事  
相模國の三大祭りといえ  
ば、五月五日の國府祭(こ  
うのまち)、七月十五日の  
一ノ宮寒川さまのお浜降り  
と、鶴ヶ岡八幡宮の九月十  
五日のお祭りを指している  
が、この相模國府祭の歴史  
は極めて古く、且つ又この  
様な祭はその昔日本全国各  
國々に於て、その國の國司  
が祭司となつて執行(とり  
おこな)つて居つたという  
而かし今日迄残つてゐるの  
は我が相模國府祭と、その  
形式の一部を残す武蔵國の  
六所、大國魂神社の同じ五  
月五日の闇(やみ)祭りだ  
けであり、古代祭の研究上  
極めて重要なものであると  
いう。さてこの相模國府祭  
に集まる各社とも、粽の  
神事があるがその粽とは、  
お餅を小さく切つて青い茅  
の葉で包み、さげる様にし  
てある古代我々祖先のお弁  
当であるが、二宮川勾明神  
ではその茅を刈る山、刈る  
日、刈りに行く家等は太古  
から定まつている。まず刈

る山といへば古道足柄道、  
後の鎌倉街道に接し六本松  
峠に近い、沼代山林地主林  
重雄家の將軍山、刈る日は  
五月三日、刈る家は現小田  
原市山西、旧磯長(しなが  
)郷分で川勾明神々事にゆ  
かりの深い旧家志沢家を主  
とした三家である。ところが  
その茅を刈る將軍山には  
大昔から狼が住んでいる、  
そこでその狼に塩を喰はし  
そのすきに手早く茅を刈り  
取るということから、毎年  
五月三日早朝馬に塩俵をつ  
けて、古道を通り山主の林  
家に塩を納めて茅を刈る、  
林家では茅が刈り終るとそ  
の方々を家に招じ、酒肴の  
もてなしをしたという。  
而かし近頃茅を刈る神事  
には変りはないが、塩は金  
沓封の塩代となり、馬は車  
に変わつてゐるが、古代我々  
祖先の人達の朴歌的な考え  
を現代に伝える神事である  
◎御散原の相撲で

記載のほか、それより二百  
年も古い、奈良朝は天平七  
年(七三五)の正倉院「相  
模國府附戸粗交易帳」即ち  
相模國司が奈良の都に年貢  
を送つた古文書に、餘綾郡  
中村郷云々と記され、尚光  
明皇后の食封の地でもあつ  
た所であるが、この中村郷  
下ノ中村即ち現橘地区一円  
の総鎮守白鹿明神の例大祭  
は元慶(八七七)の昔から  
重陽の節句(九は支那では  
陽その陽重なる即ち九月九  
日、丁度稔りの秋農民の豊  
年を祝う日)とされ、豪族  
中村氏は建久二年(一一、一  
九一)神輿(みこし)を造  
つて「原前之手浜」に浜降  
祭を挙行したと同社古文書  
に記してある古い有名な祭  
である。その御浜降の御旅  
所、御散原に神輿が着御、  
七十五膳奉納の式が終ると  
この中村郷を境として東は  
相模野、西は酒匂平野の双  
方各地から、我れこそほと  
腕に自信のある若者達面々  
が集まつて、東西対抗大相  
撲が今兩大戦迄毎年展開さ  
れた。ところがその双方陣  
営力士に付き添つて来る、  
今日でいうなら応援団や愛  
角家達で何時も祭典場は超  
満員、一番々々の取り組で  
行事の軍配の揚る度に歓声  
怒声で大さわぎ、勝負にい  
かさかの懸念でもあろうも  
のならそれこそ大変、取り  
組が進まぬばかりか、東西  
双方の論争からなぐり合い  
の御散原は小高い丘であつ  
たというが、一方がこの祭  
典場を占拠して薪(昔の武  
器敵に投げた)を積んで構  
えれば、下に降りた一方は  
金蔵(かなやぶ)の竹林を  
伐り払つて竹槍で応戦、お  
陰で神輿の御掃遣は三日も  
過ぎたということがしばしば  
あったという。この様な  
ことからこの辺では、何か  
事件が起きて当人同志はさ  
ほどでもないのに、その双  
方の取り巻き連がさわぐど  
ころを「御散原の相撲で側  
かわ」がきかない」とい  
うたとなつてゐる。

◎竹見家の門松  
私から数えて六代前の祖  
文化の頃といへば今から凡  
そ百五〇六十年程前のこと  
その何年かははっきり伝え  
ておらぬが、お正月を迎え  
るに土蔵の前に門松を建て  
た。尤も昔は門松といつて  
も門の前ではなく、母家、  
土蔵、屋敷神とそれらの  
前に建てたという。そして  
正月七日迄を松の内という  
様で、八日の朝には戸口や  
門のお飾りと共に門松も取  
り払い、その松の先端を伐  
つて門松の杭木の穴に挿す  
これを全国何処でも「とび

と松」と称している。もし  
てこの八日には「山祭り」  
といつてその年の明けの方  
向の田畑や山林に参つ  
て耘い初め即ち仕事始めを  
した。而かし近年はこの山  
祭りも三ヶ日の終つた四日  
となつた。尚古代の山祭り  
は休月中には神に奉仕をし  
つ休養をして、二月になつ  
て始めて馬を曳き出す、こ  
れが「初馬」即ち今日の「  
初午」の語源である。さて  
我が家六代前の祖はその土  
蔵前の「とびと松」が田を  
耘ふ頃となつても尚蒼々と  
して元気が良く、松のみど  
り(新芽)が伸びてゐるの  
に驚き、且つ我が家を取り  
巻く昔の家の子郎党の人達  
も集まつて、田の土を根も  
とに運ぶやら、廻りと竹垣  
を造るやらして大切にした  
処、その丹精の甲斐あつて  
すくすくと伸び、たちまち  
近郷近在の評判となり、兩  
來我が家では年々お飾り造  
りには、「しめ縄」を新に  
して我が家のシンボルとし  
て大切にしておつた。あの  
曾我山を越えた西郡一帯で  
も、竹見というより「門松  
の家」の方が通り名となつ  
ていた程である。私の代に  
なつては既に老木の為、目  
に見える伸はなかつたが目  
通り一丈余、樹は天を摩す  
大木で我が庭に一段の美観

を添え、新幹線に乗つても  
窓越に見る程であつたが  
残念なこと目下我が国名  
所旧蹟の松迄襲つてゐる、  
松喰虫の犯すところとなり  
先年この名木も終にその影  
を消し、先祖に申し訳なく  
思つてゐる。

を添え、新幹線に乗つても  
窓越に見る程であつたが  
残念なこと目下我が国名  
所旧蹟の松迄襲つてゐる、  
松喰虫の犯すところとなり  
先年この名木も終にその影  
を消し、先祖に申し訳なく  
思つてゐる。



### 編集後記

◇新年度を迎え、緑が生き  
生きと映える季節がやって  
参りました。会員のみなさ  
んのご健康を祈ると共に原  
稿をお待ちしております。  
◇民話、伝承についての投  
稿を、各地に在る管です  
再発見してください。  
◇扶桑文化協会殿へ。  
小田原地方の「鉄」の歴史  
を知ることが大切だと思  
います。次回から載せる予定  
(H)

民話伝承に  
ついて  
ご投稿を  
お願いします